

国立天文台客員教授等報告書

受入教員 プロジェクト名：水沢 VLBI 観測所 氏名：本間 希樹

客員氏名：馬場 幸栄

称号： 客員教授 客員准教授 客員研究員 (○をつける)

期間： 2016年4月1日 ～ 2017年3月31日

I. 以下の項目について、客員教授等本人が記入してください。

[1] 主な活動と成果 (当初の計画についても記入すること)

<共同研究>

本研究は、設立から120周年を迎えようとしている緯度観測所(明治32年-昭和63年。国立天文台前身組織のひとつ。)の歴史的役割と重要性について国立天文台水沢 VLBI 観測所(以下「国立天文台水沢」と記す)収蔵資料を通して広く研究者・地域住民の方々にご理解いただき、国立天文台への支援へとつなげていくことを目的としている。その実現のため、国立天文台水沢と共同で(1)国立天文台水沢収蔵資料の整理・修復・復元、(2)緯度観測所元所員らへの聴き取り調査、(3)緯度観測所をテーマとした展覧会・講演会の開催、(4)学会発表および論文等の寄稿を実施した。

1. 国立天文台水沢が収蔵する未整理の公文書・私文書・論文・写真・図面・掛図等については、歴史的価値が高いものから温湿度・紫外線照度がコントロールされた図書室一角に移動し、長期保存用中性紙製保存容器に収納し整理した。乱雑な綴じや皺が原因で物理的に閲覧できない簿冊・図面は資料管理者の許可を得て解綴・フラットニング等を施し、修復した。また、ガラス乾板の一部を2400dpi・16bit グレースケールで高精細スキャニングし、保存用TIFFファイルおよび閲覧・展示用JPEGファイルを生成し、展示用パネルも制作した。
2. 緯度観測所歴史資料の来歴・内容を調査するために、緯度観測所元所員・そのご家族・ご友人のご協力を得て約20回にわたる聴き取り調査を実施した。80歳代・90歳代の元所員の証言によってガラス乾板写真に記録された人物・建造物の多くが特定されたほか、ご家族・ご友人たちの証言によって所員たちの日常生活や退職後の足跡も少しずつ判明してきた。
3. 国立天文台水沢収蔵資料の整理および調査の成果を市民・研究者に知っていただくために、緯度観測所をテーマとした展覧会を岩手県内で2回開催した。奥州市文化会館Zホールで開催した1回目の展覧会は日本測地学会の依頼によって開催され、測地学関係者が来場された。奥州宇宙遊学館で開催した2回目の展覧会には、田中館愛橘科学記念館館長や緯度観測所関係者が越しくくださった。この展覧会は奥州宇宙遊学館の来場者記録を更新するほどの盛況ぶりで、新聞・テレビでも取り上げられた。
4. 本研究の学術的成果については、国内学会および国際コンソーシアムで計3回発表した。また、本研究と緯度観測所120周年についての記事を『国立天文台ニュース』に寄稿した。

国立天文台前身組織のひとつである緯度観測所を知らない世代が増えている現在、国立天文台水沢収蔵資料を整理・調査してその成果を広く発信できたことは緯度観測所と国立天文台水沢が果たしてきた歴史的役割についての理解・支援を得るうえで効果的であったと考える。今後も国立天文台水沢と協力しながら、緯度観測所関連資料の整理・調査・公開・研究発表を継続してゆく予定である。

<教育> ※以下、時系列で記す。

1. 文化庁調査員による現地調査（2016年8月）において、国立天文台水沢収蔵の図面・行政文書を示しながら緯度観測所の事務所（現木村栄記念館）、庁舎（現奥州宇宙遊学館）、眼視天頂儀室、目標台の計4件が国の登録有形文化財（建造物）に値することを説明した。その効果もあって、これら4件の建造物はすべて登録有形文化財となることが決定した（2017年7月）。
2. 日本測地学会の第126回講演会（奥州市文化会館Zホール）において「緯度観測所乾板写真展」を3日間開催し（2017年10月）、国立天文台水沢収蔵の緯度観測所使用経緯儀2台と復元したガラス乾板写真を展示し、解説を行った。若い研究者たちも興味を示してくれたほか、経緯儀や緯度観測所の当時の様子について来場者から貴重な情報を得ることもできた。
3. 第18回図書館総合展（パシフィコ横浜）において「小規模図書館でもできる ガラス乾板写真の復元と活用」というポスター発表を3日間にわたって行った（2016年11月）。国立天文台水沢収蔵ガラス乾板から写真を復元・展示したプロセスや、それに用いた機材・技法、写真展示によって得られた地域活性化の諸効果（国立天文台水沢への関心の高まり、緯度観測所関係者の交流頻度の増加、緯度観測所建造物を登録有形文化財にしようという機運の高まり、新たな緯度観測所関連資料の発見）を発表し、図書館総合展運営委員会特別賞を受賞した。
4. 岩手県立黒沢尻工業高校から教員2名をボランティアとして国立天文台水沢に2日間受入れ、緯度観測所歴史資料の整理・調査方法について石川利昭研究技師（国立天文台水沢）とともに指導した（2016年12月）。「これまで緯度観測所のことをまったく知らなかったが、ぜひ高校生たちに教えたい」、「高校生たちをボランティアとして国立天文台水沢へ派遣することも検討したい」との感想を参加者から頂いた。
5. 『国立天文台ニュース』281号に「緯度観測事業120周年に向けて：水沢における歴史資料の整理と公開」を寄稿した（2016年12月）。当該記事において、緯度観測所の写真数点をキャプションとともに掲載したほか、国立天文台水沢収蔵資料を整理・公開して緯度観測所の歴史を知ることの意義を国内外の研究者・天文ファンに向けて訴えた。記事を読んだ国立天文台名誉教授からは「緯度観測所の歴史と特徴が正しく捉えられていて嬉しい」との感想を頂戴した。
6. 第11回国際日本学コンソーシアム「はたらく／あそぶ」（お茶の水女子大学）において「緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会」と題した口頭発表を行った（2016年12月）。緯度観測所初代所長・木村栄が謡曲を通して水沢の名士たちと親睦を深めていった経緯・背景を説明し、国内外の日本文化研究者たちから多くの関心を得ることができた。
7. 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」と題した展覧会・講演会を奥州宇宙遊学館で2日間にわたり開催した（2017年3月）。緯度観測所元所員とそのご家族・ご友人やマスコミ関係者が大勢来場され、聴き取り調査への協力を申し出てくださいったほか、国立天文台水沢収蔵資料に含まれていない貴重な緯度観測所関連資料も多数持参していただきました。この展覧会をきっかけに岩手県各所で緯度観測所関係者の交流と家族史調査が盛んになったという報告があり、地域の活性化に貢献できたことが確認された。
8. 「天文学者・川崎俊一（明治29年－昭和18年）関連写真の発見：国立天文台水沢 VLBI 観測所ガラス乾板写真調査より」と題した口頭発表を全日本博物館学会 第43回研究大会（滋賀県立琵琶湖博物館）で行い（2017年7月）、第2代所長・川崎俊一の新発見資料について発表した。

[2] 本制度に対する意見、要望など

受入教員である本間希樹所長をはじめ、本研究のあらゆる場面でお力添えくださった国立天文台水沢の皆様、緯度観測所元所員とそのご家族・ご友人の皆様、奥州宇宙遊学館の皆様、岩手のマスコミ関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。また、天文学・科学技術史・アーカイブズ学・博物館学・文化財学といった幅広い領域にまたがる文理融合型学際研究にご理解を示してくださった研究交流委員会および研究支援係の皆様にも厚く感謝申し上げます。

本制度は国立天文台と外部機関の研究交流・相互理解を深めてくれるだけでなく、普段はまったく異なる学術領域で別々に活動している研究者たちに学際的共同研究に挑む機会を提供してくれる貴重なボトムアップ型研究支援制度でもあります。本制度が益々盛んになり発展されますことを祈念しております。

[3] 国立天文台職員や大学院生と共同して行った研究等の学会発表、学術論文、解説等

<論文>

馬場幸栄「臨時緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会：天文学者・木村栄による宝生流謡曲サークル創設の経緯と背景」『比較日本学教育研究センター研究年報』Vol. 13, 123-126 頁.

<学会発表>

1. 馬場幸栄・石川利昭「小規模図書館でもできる ガラス乾板写真の復元と活用」, 第 18 回図書館総合展ポスターセッション, 於: パシフィコ横浜, 2016 年 11 月 8 日-10 日.
2. 馬場幸栄「緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会」, 第 11 回国際日本学コンソーシアム『はたらく／あそぶ』, 於: お茶の水女子大学, 2016 年 12 月 13 日.
3. 馬場幸栄「天文学者・川崎俊一(明治 29 年-昭和 18 年) 関連写真の発見: 国立天文台水沢 VLBI 観測所収蔵ガラス乾板調査より」, 全日本博物館学会 第 43 回研究大会, 於: 滋賀県立琵琶湖博物館, 2017 年 7 月 2 日.

<講演>

馬場幸栄「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」, 於: 奥州宇宙遊学館, 2017 年 3 月 4 日.

<展覧会>

1. 「緯度観測所写真展」, 日本測地学会 第 126 回講演会, 於: 奥州市文化会館 Z ホール, 2016 年 10 月 19 日-21 日.
2. 「ガラス乾板写真とともに語り継ぐ 緯度観測所を支えた人々」, 於: 奥州宇宙遊学館, 2017 年 3 月 4 日-5 日.

<その他>

馬場幸栄「緯度観測事業 120 周年に向けて: 水沢における歴史資料の整理と公開」『国立天文台ニュース』No. 281, 2016 年 12 月 1 日, 30 頁.

Ⅱ. 以下の項目について、受入教員が記入してください。

[4] 本制度に対する意見、要望など
特にありません。

※ 必要な場合は用紙を最大 2 ページ追加することができます。レポート全体の上限は 5 ページです。

※ 本報告書のうち、[1] ～ [4] は研究交流委員会 HP にて公開します。